

スウィフトの生涯 (XIII)

スカトロジカル・ポエムズ制作から
「奴婢訓」執筆まで (1730—1731 / 2)

三 浦 謙

1731年12月1日ポープはスウィフトへの書簡で、

あなたが低俗な世事や党派の利害や国事にさえも干渉しないように
決心されたのはなによりです。われわれは真理と礼節の探究に時間を
費すことにしましょう⁽¹⁾。

といている。

ところが、ポープの期待とは裏腹に、1730年および1731年、スウィフト
は巷間に物議を醸し出すことになる一連のスカトロジカル・ポエムズ（糞
尿詩）を書いている。

「婦人の化粧室」⁽²⁾ 1730年

「床入りするうら若き美女」⁽³⁾ 1731年

「カシナスとピーター」⁽⁴⁾ 1731年

「ストレフオンとクロイ」⁽⁵⁾ 1731年

「婦人の化粧室」では延々5時間におよぶ化粧を終えて出ていったシー
リアの私室の乱雑ぶりを、「床入りするうら若き美女」では深夜帰宅してく
つろぐコリーナのあられもない姿と起床時の醜態を刻明に描いている。
「カシナスとピーター」は若いケンブリッジの生真面目な学徒が美女の排
泄物に動転するはなし。「ストレフオンとクロイ」は新婚初夜の新郎新婦の
排尿にまつわる失態が目玉になっている。

「床入りするうら若き美女」が74行で最も短かく、次いで「カシナスと
ピーター」の118行、「婦人の化粧室」の144行と続き、「ストレフオンと
クロイ」が314行で最も長い。

ここでは、スウィフトのスカトロジカル・ポエムズのなんたるかを心得るために、その代表作と目される「婦人の化粧室」と、この中で最長の詩篇である「ストレフオンとクロイ」を取り上げる。「床入りするうら若き美女」は「婦人の化粧室」と類似した趣向の小篇なので、ここでは割愛する。「カシナスとピーター」は「婦人の化粧室」との関連で必要に応じて言及することにする。

ところで、「婦人の化粧室」だが、これは嬌慢な美女シーリカが身づくろいを終えて私室を出てゆくところから始まる。^{あるじ}主がいなくなり下女のペティも留守とわかると、かねがね美女の私室に少なからぬ関心を抱いていた遊び人ストレフオンが、この時とばかり、こっそりと室内に入りこみ、シーリアの化粧室を見渡して細かな在庫表を作りあげる。

まず、腋の下がこってり汚れた下着。ストレフオンは手にとって拵げてみるが、実見のほどは口に出していいようがない代物である。次は櫛目にビッシリ、ゴミが溜ってブラシをかけようにもかからない各種の櫛。額の皺を伸ばすために使うオイルの塗った布切れ。ツバやヘドや歯くそのついた洗面台。汗や耳くそで汚れきったタオル。鼻汁やカギタバコで変色したハンカチ。カビ臭いペティコート。足ゆびの跡がついて異臭を放っている靴下。シーリアが少くとも一週間は被って寝ている油ぎった頭巾。弓なりの眉毛や剛毛のような顎ひげを抜くためのピンセット。庄庫調べの最後に、ストレフオンがパンドラの筥かといぶかって蓋を開けるのをためらっていたのがなんと便器である。臭いシーリアの排便に劈易しながらストレフオンは部屋を出てゆく。

最後の16行が肝心である。ここで顔を出す一人称の詩人はストレフオンをこのまま女嫌いにはさせない。詩人は相変らず女の魅力に盲目なストレフオンを憐れんで、シーリアの着飾った姿を見た時、鼻をつまみさえすれば、うっとりするに違いないといっている。秩序が混乱から生まれ、けばけばしいチューリップが糞の山から咲き出ると同じ理つくだからだ。

したがって、たとえば、ピーター、J・シャッケル⁽⁶⁾のように、ストレフオンがシーリアの化粧室の中味、とりわけ便器の中をみて徹底した女嫌いになったと決めてかかるの⁽⁷⁾は早計である。

1731年制作の「ストレフオンとクロイ」でも便器は出てくる。ここでは

結婚初夜ベッドに臥せっていたクロイが排尿が堪え切れず便器をベッドの中に入れるが、これに気づいたストレフォンは、この一件で天女のようなクロイも更めて人間であることを知るので、ここでも女嫌いの道具立てに便器が使われているわけではない。

谷崎潤一郎の『少將滋幹の母』に、色好みの平中が左大臣藤原時平^{しへい}に仕えていた女房である本院の待従に惚れる話がある。平中は女童^{めのわらわ}に文を持たせたり忍び歩きを繰り返すなどして機会を伺うが、世に稀な美女といわれる本院の待従を垣間見ることさえできない。業を煮やした平中は、こうまで無視されるのなら、いつそ諦める方法はないものかと思案の末、待従のお虎子^{まゐる}を盗んで中味をしらべることに決める。いくら類い稀な美女といっても、お虎子の中味を知れば興覚めになろうという気持からだ。ところが、平中は待従の召使いからお虎子を奪い取って自室で中味をしらべようと蓋を開けたとたん、その馥郁たる香りに魅せられて排泄物の味見までしてしまう。

ストレフォンは平中のように女の排泄物に蠢惑されるとは書いてないが、オールダス・ハックスレーが、その「スウィフト論」⁽⁸⁾で指摘しているように、スウィフトの場合、排泄物への嫌悪は単なる嫌悪の段階に止まらない。世の中には通常以上に嫌悪に敏感な人間がいる。彼らは嫌悪にうち克つことによって異常な喜びを味わう。ハックスレーはマダム・ギヨン⁽⁹⁾の例を挙げている。

マダム・ギヨンは不潔で不快な物への嫌悪は神を求め神と共に生きることをもっぱらとする人間には恥ずべき弱点であると感じていた。ある日、彼女はこの弱点にうち克とうと決心した。路面にムカムカする唾の塊りを見た時、彼女はつまみ上げて激しい嫌悪を感じながらも口の中に入れた。吐き気を催す嫌悪感に次いで深い喜びが湧き起った⁽¹⁰⁾。

ハックスレーはこの後で、きわめて宗教心から縁遠い人たちでさえも、本能的な抵抗をまともに感じながら、ある行為を達成した後には強い満足感を味わうものだと付け加えている。

ストレフォンもシーリアの化粧室を出た後で満ち足りた気分になったか

も知れないのだ。それに、不潔への単なる嫌悪のみだったら、かくまで精細な汚物の描写はできなかつたように思える。

やはり、同名のストレフオンが主役の「ストレフオンとクロイ」ではどうか。ここでは、ストレフオンとクロイは花婿と花嫁で結婚初夜の様子が刻明に描かれる。長い間ストレフオンの頭を悩ましていたことは新妻に初夜どのように振舞えばよいかという点だった。アムブロウジアのような香気を発散させるヴィーナスのような美しい花嫁の肌が、男の針のような顎ひげや毛むくじゃらの胸をはたして受け入れるものか。ナイトキャップにレースをかければ顔に当る感じが軟かくなるのではないか。

だが、ともあれ、新妻がやさしければ初夜の喜びは測り知れないだろうとストレフオンはほくそ笑む。

ストレフオンが、あれやこれや想いめぐらすうちに、やがて花嫁クロイの床入りが始まる。花嫁が床に入ったのを見定めてからストレフオンは裸身で、そっと床にしのび込む。だが、気がねして花嫁との距離をすぐには埋めようとしなない。

ここで、詩人は花嫁の親に嫁ぐ日には娘にビールをガブ飲みさせるなど苦言を呈する。紅茶も午後は控えさせる。飲みたいというなら早い時間に飲ませて床に入る時には尿意を催さないようにさせるべきだという。

さて、床に入った2人だが、幸運の女神は勇者に味方すると伝え聞いていたストレフオンは思い切ってクロイにアタックする。そして、クロイの激しし抵抗に遭う。雪のような肌をしたクロイのような貞潔な美女が、どうして野蛮な男の接触を許そう。仔羊でさえ屠殺業者をみれば本能的に跳びあがる。結婚初夜の抵抗は処女の生得の権利である。

ところが、クロイは洩れないように抑えに抑えていた12杯分の紅茶の仕末に困惑する。詩人の苦言を無視したせいである。自然の要求でクロイは手をそっと出して便器を床の中にひきずりこむ。香煙を出して流れ落ちる細流の音を聞いたストレフオンは、はて何の音かといぶかる。細流の音がクロイの仕業とわかると、ストレフオンは更めてクロイも同じ生身の人間であることを知る。やがて、ストレフオンもクロイに元気づけられて同じ自然の要求から便器を取り上げるが、満杯にした残りをうっかり彼女の顔にかけてしまう。これではたまらない。花輪を頭に被ってベッドの周り

をとび廻っていた愛の神キューピッドも堪らず姿をかくしてしまう。待ち望んでいた初夜の歓楽もこれでおさらばとなる。

本篇末尾の 293 行から 314 行にはスウィフトのお説教がみられる。建築業者が家を建てるに当って土地と建材を慎重に選ぶように、妻を選ぶ場合には分別と知恵と熱意と品位に留意すべきだという。女のはかない容色に溺れるのは、乾草と刈り株で砂地に泡のような家を建てるのに等しいとスウィフトは戒めている。

1730 年と 1731 年に制作された上記 4 篇の中、「床入りするうら若き美女」を除く 3 篇に共通するのは女性の排泄物への関心である。スカトロジカル・ポエムズといわれる所以である。

おもしろいことに、「婦人の化粧室」と「カシナスとピーター」で同じ詩句が使われているところがある。Oh! Celia, Celia, Celia shits! (あっ! シーリア, シーリア, シーリアが糞をする!) という一行である。「婦人の化粧室」では劈易したストレフオンがこの文句を繰返しながらシーリアの室を出てゆく。「カシナスとピーター」では、カシナスがこのことばを口に出して、自身の気持が動転したのも無理なからうとピーターに打明ける。違いといえば、多情なストレフオンが、発作が起きたように、このあからさまな詩句を反復させるのに、純一なカシナスは最後の一語がことばにならず、sh—で途切らせてことばを詰らせている点である。

『ガリバー旅行記』では、第一篇でリリパット王宮内の王妃の御座所の出火をガリバーが自身の排尿で消すくんだりから、第 4 篇で木に登ったヤフーの団にガリバーが頭から排尿を浴せられるくんだりまで、全篇を通じてスカトロジカルな記述が跡を絶たない。

『ガリバー旅行記』刊行後、4、5 年を経て 60 代半ばにさしかかって、『ガリバー旅行記』にみられたスウィフトの糞尿嗜好が女性のそれに絞られてきたのはおもしろい。悪名高いスカトロジカル・ポエムズは、事実とはまれ、スウィフトに「女嫌い」のレッテルを貼ることになった。

スカトロジカル・ポエムズの他に、スウィフトはこの時期、「スウィフト博士の死に際会して」⁽¹¹⁾ という 484 行の長詩を書いている。この詩は 1739 年に刊行されたが、1731 年末にはほぼ出来上っていた。同年 12 月 1 日のゲイ宛の手紙で、

私はこれまで数ヶ月かけて約500行の詩を書いています。おもしろいテーマで、私の死後、友人や敵が私のことをどんなふうに取り上げるかが軸になっています⁽¹²⁾。

といている。

傍題で明らかにしているようにロシュフコーの箴言を読んだのが、この詩を制作する契機になった。

スウィフトが共感したロシュフコーの箴言とは、

最良の友人の逆境にさいしても、われわれはかならずしも痛苦を覚えない⁽¹³⁾。

という文句である。

だが、詩全篇がこの問題に終始しているわけではない。スウィフトの死にさいして取沙汰される友人知己の思惑は全体の3/5で、これに引き続いて同時代人で宗教界の反逆児であるトーマス・ウールストン⁽¹⁴⁾への共感を謳い、最後にスウィフト自身その人となり率直に述べている。

はじめの3/5はスウィフトのシニカルな性情が露わで読んでいてやりきれない気持ちになる。たとえば、スウィフトの死を男友達達が悼む場面で、

私が死んで歎くといっても
 ポープなら一ヶ月、ゲイなら
 一週間、アーバスノットなら一日だろう。

(205—207)

といい、

友人の死をなぜわれわれは歎くのか。
 これほど埋め合わせが容易な損失はない。

(243—244)

といている。

ポープとはお互いにその資質を高く評価し合った仲だし、ゲイのことをスウィフトは銀行預金の利子のように考えたことは一度もなかった。アーバスノットは彼が12人いたら『ガリバー旅行記』は書かなかつたらうとス

ウィフトがいていた間柄である。上の詩句に接しても、犬儒家ポープは笑ってすまそうが、スウィフトをまたとない友人と信じ切っていたゲイやアーバスノットがみれば撫然たる思いがしたに違いない。幸いなことにゲイもアーバスノットも、この詩が発刊された1739年にはすでに他界していた。

トーマス・ウールストンはケムブリッジ、シドニー・サセックス・カレッジ⁽¹⁵⁾の特別研究員になってから聖職に就くが1705年『キリスト教の真実性にかんする旧来の弁明』⁽¹⁶⁾を出して聖書の寓話は歴史解釈に反すると主張したため、特別研究員を罷免された。その後、一段と攻撃的になり『キリストの奇蹟』⁽¹⁷⁾でその信憑性を取り沙汰したため、不敬のかどで裁判にかけられてキングス・ベンチ⁽¹⁸⁾に投獄され、1733年獄死した。

スウィフトは次のようにいっている。

彼は聖職者の策謀を勇敢に踏みにじって

イエスが大のペテシ師で

奇蹟はすべて手品師の

手品まがいの詐術であることを

確実に示した。

国教会にかような聖職者はこれまでいなかった。

彼が^{ミト}司^{トラ}教冠を授からなかったのは口惜しいことだ!

(292—198)

スウィフトは若年の頃は、名誉革命に賛同できずウイリアム王とメアリーへの忠誠を拒否したために追放処分になったカンタベリー大司教ウイリアム・サンクロフト博士への頌詩を書いている。スウィフトは生涯国教会の枠を越えることなく宗教的には保守的であったが、サンクロフト博士といい、ウールストン師といい、人間味溢れる気骨ある宗教家への鑽仰の念は終始変ることがなかった。そして、次の言葉にみられる通り宗教者のあり方をスウィフトは常に模索していたのである。

神と人間の和合がキリスト教の大きな項目なのだから、神にかんするその述作の中に人間を全く欠いた牧師がみられるのは奇妙である⁽¹⁹⁾。

また、こうもいっている。

私たちには相手を憎悪させる宗教はあるが、相手に慈しみをもたせる宗教はない⁽²⁰⁾。

300行目からは酒場ローズ⁽²¹⁾に友人知己が集いスウィフトが話題の中心となって、その人となりを取り沙汰される。

彼の著作は韻文で書いたものも散文で書いたものも、だれもが買いもとめた。剽窃はまったくなく、すべて彼の創意だった。

(309 — 318)

栄誉を考えたことはなかった。勲章をつけた愚物を軽侮し、地位ある人間におもねることなく、権威を恐れることもなかった。

(319 — 325)

公正な自由が彼のもとめるすべてだった。

自由のために彼は死ぬ覚悟だった。

自由のために孤立することを恐れなかった。

自由のために彼はしばしばわが身を危険にさらした。

党派のいいなりに2つの王国が

彼の首に懸賞金をかけた。

だが、600ポンドで彼を売り渡そうとする

裏切り者は一人も出なかった。

(347 — 354)

弁舌とペンを控えていたら

出世したかもしれない。

だが、権力の座は彼の頭にはなかった。

(355 — 357)

かの首任司祭の筆は本領とはいえ

諷刺をむきだしにし過ぎたといえよう。

だが、彼は諷刺を絶やさないことに腹を決めた。

当代ほど諷刺に値する時代はなかったからだ。

危害を加えることが、彼の狙いではなかった。

彼は悪をこらしめ名を惜しんだ。

(455—460)

347行目の「公正なる自由」とはなにか。

それはドレイピア事件にみられたような政治的圧制からの自由である。スウィフトはアイルランドを奴隷の国とよび、アイルランドのイングランドへの隷従を断ち切って選択の自由と意志決定の自由を獲得することが生涯の宿願であった。果せなかったが、そのために彼は生命を賭け、わが身をしばしば危険にさらした。彼の首には600ポンドの懸賞金がかかった。それは1714年スウィフトが執筆した「ホイック党の公共精神」⁽²²⁾に激怒したアーガイル公爵が執筆者の嚴重な処罰を要求してアン王女に出させた300ポンドの懸賞金とドレイピア事件のさいカーレットがやむをえず出した300ポンドの懸賞金である。それぞれ300ポンドで奇しくも同額であったのは興味深い。だが、いずれの場合もスウィフトにとって幸いなことに、懸賞金目当てにスウィフトを訴え出る者はなかった。スウィフトの生涯を顧みるとき、347行から350行までの詩句

公正なる自由が彼のもとめるすべてだった。

自由のために彼は死ぬ覚悟だった。

自由のために孤立することを恐れなかった。

自由のために彼はしばしばわが身を危険にさらした。

は事実そのまま決して誇張ではない。

ところで、この詩が出版されたのは1739年である。ロンドンの出版業者チャールズ・バサースト⁽²³⁾がポープの助言を受け入れ、1739年ウールストンに関する個所とスウィフトがおのれの人となりをあからさまに述べている個所の合せて約160行を削除して刊行した時スウィフトは大いに不満で無削除の出版を心持ちしていた。ダブリンの出版元ジョージ・フォークナー⁽²⁴⁾がスウィフトの要望に応じて同年無削除で出版すると多大の反響をよび年内にさらに4版を重ねた。この484行の長詩はスウィフトの数多い詩⁽²⁵⁾の中で最もよく売れたといわれている。

1731年に舞台は戻る。同年8月から向う一ヶ月間スウィフトはジョン・

タワーズ師⁽²⁶⁾と、ウィックロー郡、パワースコート⁽²⁷⁾の景勝の地で短い夏の休暇を過した。タワーズ師はダブリンの聖パトリック聖堂の篤実な参事会員で、パワースコートの牧師をも兼務していた。そのさい、スウィフトは「会話文典」⁽²⁸⁾と「奴婢訓」⁽²⁹⁾の原稿を携えていたといわれている。

1732年6月スウィフトがポープに語ったところによると⁽³⁰⁾、スウィフトは28年前の1704年頃からのこの2つの作品を手がけていた。

スウィフトが、このどちらを先きに書き出したのかは不明だが、「会話文典」は1732年6月にはほぼ書き終えていた。「奴婢訓」はこの時点では、執筆中であったが、結局、未完に終わっている。

「会話文典」はファッションとトランプに明け暮れる不信心のホイッグ、サイモン・ワッグスタッフ⁽³¹⁾の筆になる。場所はスマート卿夫妻⁽³⁰⁾のロンドンの邸宅で、対話は彼ら夫妻と6人のゲストの間で交わされる。

彼らはすべて富と権力をもつ上層階級の人間で、その会話はウイッティで笑いを誘う。

「会話文典」はほぼ1万語におよぶはしがきと2万語に達する3つの対話でできている。時代は1702年から1714年のアン王女の治世である。

対話はセント・ジェームズ・パークのスマート卿邸で交される。朝食、ディナーおよびティータイムに上記のメンバーで交される対話である。対話1が最も長く、対話2、3がその順序で続く。ダービーシャーの卿士サー・ジョン・リンガー⁽³³⁾は対話2にだけ登場して土地の訛で話す。

この対話集にはスウィフトが当時のフレーズ・ブックを隈なく渉猟して集めたかと思われるほど数多くの諺やキャッチフレーズが随所にちりばめられている。主役は若い独身男女であるネヴァーアウト氏⁽³⁴⁾とノータブル嬢⁽³⁵⁾である。女好きのするせっかちな優男ネヴァーアウト氏はノータブル嬢を追い廻すがウイッティな美女ノータブル嬢は相手をはぐらかし、時には辛辣なことばでやりこめる。

やりとりはこんな具合だ。イタリック体は当時用いられていた諺ないしはキャッチフレーズである。

Colonel Atwit: My Lord, I suppose you know, that Mr. Buzzard has married again.

Lady Smart: This is his fourth Wife; then he has been *shod round*.⁽³⁶⁾

Colonel Atwit: Why, you must know, she *had a Month's Mind to*⁽³⁷⁾ Dick Frontless, and thought to run away with him; but, her Parents forced her to take the old Fellow, for a good Settement.
Lord Sparkish: So *the Man got his Mare again*.

.....

Colonel Atwit: I know nothing of that, but I know, he's devilish Old, and she's very Young.

Lady Answerall: Why, they call that *a Match of the World's making*.⁽³⁸⁾

Miss Notable: What, if he had been Young, and she Old?

Neverout: Why, Miss, that would have been *a Match of the Devil's making*: But, when both are Young, that's *a Match of God's making*.

[Miss searching her Pocket for a Thimble, brings out a Nutmeg.]

Neverout: O Miss! have a Care; for *if you carry a Nutmeg in your Pocket, you'll certainly be married to an old Man*.

Miss. Well, and if ever I be married, it shall be to an old Man; they always make the best Husbands: And *it is better to be an old Man's Darling, than a young Man's Warling*.⁽³⁹⁾

(アトウィット大佐：閣下、ご存じと思いますが、バザード氏が再婚されました。

レイディ・スマート：これで4度目の奥さんね。馬だと四本の肢に蹄鉄をはめたことになるわ。

アトウィット大佐：ところで、驚いたことに彼女はディック・フランドレスに気があったんです。2人は逐電しようとしたんですが、彼女の両親が無理やり年寄りと一緒にさせたんです。楽な暮らしをさせるためにね。

スパークッシュ卿：こうして亭主が再び雌馬を手に入れたわけだ。

.....

アトウィット大佐：私はなにも知らないんだが、ただ、知っていることは彼がえらく年寄りで彼女がとても若いということです。

レイディ・アンサーロール：まあ、そうなの。世間ではそういうのを打算的な組合せっていうわね。

ノータブル嬢：彼が若くて彼女が年寄りだったらどうなりますの。

ネヴァーアウト：そりゃあ、あなた、それだったら悪魔が決めた取合せになるでしょう。両方が若ければ、神様のおぼしめしの取合せですよ。

〔ポケットを手探りして指貫を探しているノータブル嬢がニクズク(香料)の種子をとりだす。〕

ネヴァーアウト：あぁ、あなた！お気をつけなさい。ニクズクの種子をポケットに入れていたら、あなたは、まちがいなくお年寄りと結婚することになるんです。

ノータブル嬢：そうですの、私、結婚するとしたら、お年寄りといたしますわ。お年寄りはいつも素敵な旦那さまになりますから。それに、若者にのけ者にされるよりはお年寄りに可愛がられるほうがましですわ。

ネヴァーアウトやノータブル嬢と同じく独身で大食漢のアトウイット大佐は女性には辛辣である。レイディ・スマートにどうして結婚しないのかときかれて、こう答える。

Col. I'gad, Madam, I'd marry Tomorrow, if I thought I could bury my wife just when the Honey Moon is over; but they say, *a Woman has as many Lives as a Cat.*⁽⁴⁰⁾

(大佐：そりゃあ、奥さん、ハネムーンが終った直後に妻を埋葬できると思ったら明日にでも結婚しますよ。でも、女には猫のように七生があるといいますからねえ。)

やはり、レイディ・スマートから、いい奥さんだと別れるのが辛いわよといわれると、

Col. Yes, Madam, for they say, *he that has lost his Wife and Six-pence, has lost a Tester.*⁽⁴¹⁾

(大佐：そうですねえ、奥さん、妻と6ペンス失くした男は12ペンス銀貨を失くしたことになるといわれますからねえ。)

と答える。

ダービーシャーの郷士でネヴァーアウトと親しい仲のサー・ジョン・リンガーもアトウィット大佐に負けず劣らず女に辛辣である。レイディ・スマートがあなたの奥さんはなかなかウィットのある方だそうですねという

Sir John. Madam, she can make a Pudden; and has just Wit enough to know her Husband's Breeches from another Man's.⁽⁴²⁾

(サー・ジョン：奥さん、女房はプディングは作れますし、自分の亭主のお尻とほかの男のお尻を見分けるぐらいの分別はありますよ。)

とサージョン・リンガーは野卑なユーモアで応ずる。

他の登場人物スマート卿夫妻、レイディ・アンサーロール⁽⁴³⁾、スパーキッシュ卿はすべて添物的な存在である。

上記の引用例からもわかるように、このスウィフトの「会話文典」は原題から推察されるのとは裏腹に、礼節を尚ぶ会話の模範文集ではなく、当時、上層階級の間で交されていた日常の対話集である。エリック・パートリッジは、往時の用語を知る上で、またとない資料だといっている。

「会話文典」は1738年2月28日ロンドンで発刊され、その後間もなくダブリンでも上梓された。

サッカレーは『イギリスのユーモリスト』⁽⁴⁵⁾の中で、この異質の作品を取り上げ、140年前聖ジェームズ宮⁽⁴⁶⁾の女官やホワイト⁽⁴⁷⁾のチョコレート・ハウスに足繁く通っていた連中の日常を活写したドキュメントとして、「会話文典」ははなはだ興味深いといっている。

「奴婢訓」は召使心得一般とそれに続く16章からなる細則でできている。細則では16種の下僕下婢が取り上げられている。

この「奴婢訓」は7年間従僕の経験があり、その後、心ならずも税関の小役人に転じた元奴僕の手になるということになっているので、召使心得一般も次のように一風変わった筆法で書かれている。

若くて美男だったら、食卓で奥さまにささやく時、奥さまの頬に鼻

を目一杯当てて、ゆっくりと撫でる。いやな口臭がなければ、奥さまの顔に息をたっぷり吹きかける。お邸によっては、これがたいへん良い結果を生んでいる⁽⁴⁸⁾。

3度か4度呼ばれるまでは決して応じないこと。口笛一つで飛んで行くのは犬だけだ⁽⁴⁹⁾。

召使の集合場所は、夏でも冬でも、ふつうは台所である。厩舎、搾乳場、食品貯蔵室、洗濯場、地下室、子供部屋、食堂、奥さまの寝室、そのいずれにせよ、お邸内の問題は台所で話し合う。そこなら、だれしも思うがまま、笑おうと、わめこうと、はね回ろうと、絶対に安全である⁽⁵⁰⁾。

誤ちを仕出かしてお叱りをうけた時には、部屋の出がけや階段の途中で聞こえよがしにぶつぶついうこと。冤罪と思わせる効果がある⁽⁵¹⁾。

主人や奥方の留守中、だれが訪ねてきても、客人の名前を覚えておこうなどとするな。お客の名前を覚えておくのは門番の役目で、門番を置かないのは主人が悪い⁽⁵²⁾。

奥方の部屋へ呼ばれて用件をうけたまわる時は、きまって戸口に立って、ドアを開けておき、奥方がしゃべっている間中、錠前をいじくり、ドアの留め具に手をかけていて、出しなにドアを閉めることを忘れないようにする⁽⁵³⁾。

召使のローソク立はふつうこわれている…だが、その場しのぎの便法はいくらでもある。ビンにさしてもいいし、バターの塊で内壁の板張りにくっつけてもいい。角製の火薬筒、古靴、折れたステッキ、ピストルの銃身に立ててもいい…

コーヒー茶砲、コップ、角製の筒、茶壺、ひねったナプキン、芥子ビン、インク壺、牛の脛骨、ねり粉にも立てられる。パンに穴をあけて、そこにさしてもいい⁽⁵⁴⁾。

このような召使一般の心得のあとに、16種の召使への個別の指南が続くが、筆者自身直接7年間経験した職種だけに、第3項の「従僕」が委細を

極め最も興味深い。

従僕の仕事はその混み入った性質上、多種多様にわたるが・・・お邸界限では「さん」附けで呼ばれ、時には主人のお嬢さんに見染められるというような幸運をひき当てることもある。それに、軍隊では従僕上がりの連中が羽振りを利用していた例を私はいくつも知っている。

ロンドンでは芝居小屋に予約席があるので、その世界で才人や批評家になる機会もある・・・私はかつて従僕の一人たる光栄を担ったので、この務めには真実敬意を抱いている・・・従僕諸君がさらに幸運をつかむよう、思索と観察の結実である訓戒をここにいささか述べようと思う⁽⁵⁵⁾。

日曜日、教会に奥方をお送りしたら、2時間は酒場で友だちと過したり、家でコックや女中とピフテキを食べたりビールを飲んだりしても心配はない。実際、召使というのは憐れなもので愉しむ機会はほとんどないから、機会があれば逃してはならない⁽⁵⁶⁾。

食事の給仕をする時は決して靴下をはくな、自身の健康のためにも食卓に向っている人たちの健康のためにも。若い男の足の指の臭いは大かたのご婦人のお好みだし、ご婦人がたのふさぎの虫には、この上ない妙薬だから⁽⁵⁷⁾。

食事が終って、食器類をダイニング・ルームから持ち出す時、できるだけ両手に満載していくこと、時にはこぼしたり、落したりすることもあるが、一年の終りには迅速な処理と節約された時間がどんなに大きかったかがわかる⁽⁵⁸⁾。

あなた方お仕著^{しきせ}を着た従僕は不運なことにだれからも無礼な仕打ちをうけるが、なんとか気をとり直してやっていると、時にはなかなかの幸運にめぐり会う。仲間の一人が私の親友で、彼はさる女官の従僕だった。この女主人は栄誉ある職務に携わり、伯爵の姉で、亡くなった夫君も上流の出だった。彼女は私の友人の礼儀正しさ、椅子の前を小走りに通りぬけるさいの品のよさ、髪の毛を帽子にかくす意気な振

舞等に心を奪われ、いく度となく彼に秋波を送った。ある日、この従僕トムをお供にして馬車で外出したさい、馭者が故意に道を取り違えて、婚姻にかんして、しかるべき特権を有する礼拝堂前に馬車を止めた。そこで2人は結婚しトムは夫人と並んで馬車で邸にもどった。

ところが、不幸なことに、トムは夫人にブランディの味を教えこんだ。夫人はブランディを買うため食器類を残らず質入れした揚句、酒がもとで死んでしまった。トムは目下のところ麦芽酒作りの職人として精出している⁽⁵⁹⁾。

従僕で老いるのは、この上ない屈辱である。だから、寄る年波を感じながら、宮仕えの口や武官任用の機会や執事の後釜や税務の仕事(後の2つには読み書きの能力がいる)や主人の姪や娘と駆落する見込が全くなかったら、率直にいうが、追剥になるがいい。これが残された唯一のポストである。追剥なら、昔の仲間にも大勢会えるし、笑い顔で太く短かく世を送り、今わの際には一花咲かせることもできよう⁽⁶⁰⁾。

「奴婢訓」の背景となっているのは、主人、奥方、子供たち、ポール・モール⁽⁶¹⁾、ラムプル・バー⁽⁶²⁾、セント・ジェームズ・パーク等への言及があることからわかるようにロンドンの中流とおぼしき家庭であって、スウィフトが起居していた牧師館ではない。だが、多年にわたる牧師館でのスウィフトの体験と観察が軸になっていることは間違いない。スウィフトは牧師館で家政婦、料理人、雑役婦、従僕、馬丁を置いていた。晩年には馬車を備え馭者まで雇っていた。そして、時には臨時の仕事を手伝わせるために、大聖堂から堂守や寺男を呼びよせることもあった。

スウィフトはこれらの召使をとりしきるため、召使が遵守すべき規定⁽⁶³⁾をもうけて、次のように不心得者には容赦なく罰金を課している。

2人の召使のいずれか一方が酔払っていても、イングランド通貨の5シリング銀貨を罰金として支払うものとする⁽⁶⁴⁾。

主人が在宅中、主人に知らせることなく、またその許可もえずに外出したさいには30分ごとに6ペンスの料金を支払うものとする⁽⁶⁵⁾。

食卓で給仕中、指示もうけずに2人の召使が部屋を空けるさいには、後から退出した方が食費としての支給額から3ペンスを料料として支払うものとする⁽⁶⁶⁾。

だが、スウィフトは召使を総じて好遇していた。きまった給与の外に、牧師館で3度の食事を食べさせた上、週4シリングの食事手当を支給していた。家政婦は別格でさらに給与もよく常にスウィフトと食事を共にした。

スウィフトが馬で外出する時は、ふつう従僕と馬丁をしたがえていった。従僕はスウィフトの前、馬丁はスウィフトの後ろについて馬を走らせた。召使の中でスウィフトを最も悩ませたのはこの従僕と馬丁それに雑役婦だった。「奴婢訓」の筆者を従僕にし、その観察が最も行き届いているのは、それだけ悩まされたせいもあろう。

馬丁については次のようなことが書いてある。

時おりは主人の馬を仲間の召使とか好きな女中に貸して遊びに行かせたり、一日いくらで貸出してやるといい。運動不足で馬が駄目になるといけないから。⁽⁶⁷⁾

酒場で仲間と1, 2時間過したいので外出の適当な口実がほしい場合には、古い馬^{はろく}勒や腹帯や鍔革をポケットに忍ばせて、厩舎の戸口か母屋の裏口から出かける。帰りには、馬具屋に修理に持っていったのだというような顔をしてこんどは馬勒と腹帯と鍔革を手にはぶらさげて街路に面した裏口から入る。・・・これを実行して成功した例はいくらでもある⁽⁶⁸⁾。

スウィフトは馬丁には旅先でもいろいろと苦勞したとみえる。「旅籠での召使の務」というスウィフトが書いた取決では、馬丁の外に同行させた召使に、時おりは厩舎に入って馬丁がきちんと仕事しているかどうか確かめるようにいっている。

スウィフトは馬好きなだけに、同じ取決の中で、宿屋の厩舎に着いたら、馬は厩舎の入口からできるだけ離れた乾燥した所に引いて行けとか、乾草は新しいのに入れ替えさせろとか、馬の腹帯を緩めて十分食べさせろと

か、蹄の汚物をよく取り除いて釘の頭が緩んでいないかよく調べるようにとかいっている。

また、夜、宿に入る時は馬の足を牛糞湯でよく洗うように注意している。

このように馬への配慮が行き届けば、馬丁にはますます神経質になる。旅中、馬丁が携行すべき品を次のように事細かにスウィフトは挙げている。

鍔革、突錐^{つきぎり}、馬蹄釘12本、蹄鉄、つるはし、金槌を万一に備えて持参する。それに、縄切れ、からげ糸、栓抜き、ナイフ、小刀、針、ピン、絹糸、毛糸等。膏葉と鋏も忘れぬこと⁽⁶⁹⁾。

住込みの雑役婦への指示となると、スウィフトのスカトロジカルな好み顔が顔を出す。気位ばかり高くて怠けものの奥方には面倒がって蓋のない平皿に用を足すのがいる。その臭いときたらたまらない。部屋ばかりでなく奥方の衣装にまでもしみ込む。このいやらしい悪癖を止めさせるには、来客があったおり、平皿を両手で抱えたまま、玄関のドアを開けるがいいなどといっている。

この外、馭者、子供附の女中、乳母、洗濯女等への指示が連なるが、多くは断片的で数行で片づけられている。

だが、総じて「奴婢訓」で、スウィフトはさまざまの召使の生態をアイロニカルに描いているものの、その底には奴婢への思いやりが感じられる。前述の経済的な好遇もその一つの表れで、事実、短期でスウィフトの許を去っていく召使はまずいなかったのである。

「奴婢訓」はスウィフトが死んだ1745年、ダブリンの出版業者ジョージ・フォークナーが出版の手筈を整えた。そして、フォークナーが知人のウィリアム・ホゥイアーに述べた通り同年11月ダブリンおよびロンドンで同時に刊行を見た。

因みに、チャートン・コリンズは「奴婢訓」の中の「従僕」の項はフィールディングに『ジョナサン・ウィルド』⁽⁷⁰⁾執筆の着想を与えたといっている。⁽⁷¹⁾

注

- (1) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 510.
- (2) *The Lady's Dressing Room*.
- (3) *A Beautiful Young Nymph Going to Bed*.
- (4) *Cassinus and Peter. A Tragical Elegy*.
- (5) *Strephon and Chloe*.
- (6) Peter J. Schakel, *Swift's Remedy for Love: The "Scatological" poems*.
- (7) J. I. Fischer & D. C. Mell, Jr., ed., *Contemporary Studies of Swift's Poetry*, p. 137.
- (8) Aldous Huxley, *Do What You Will*, pp. 99-112.
- (9) Mme. Guyon (1648-1717).
フランスの神秘主義者。1695年投獄され、後、パリーから追放された。
- (10) *Ibid.*, pp. 102-103.
- (11) *Verses on The Death of Dr. Swift, D. S. P. D. occasioned
By reading a Maxim in Rochefoulcault*.
- (12) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 506.
- (13) *The Poems of Jonathan Swift* Vol. II, p. 551.
- (14) Woolston, Thomas (b. 1670).
- (15) Sidney Sussex College, Cambridge.
- (16) *Old Apology for the Truth of the Christian Religion* 1705.
- (17) *Discourses on the Miracles of Christ* 1727-9.
- (18) The King's Bench Prison. The Court of King's Bench (高等法院の前身。
国王が上座に臨御したところから。1873年廃止。) 附属の監獄。
- (19) *The Prose Works of Swift* Vol. I, p. 283.
- (20) *Ibid.*, p. 273.
- (21) The Rose. Covent Garden の Russell Street にあった。Drury Lane Theatre の隣りで、観劇の客がよく集まった。17世紀末、昼間とは打って違って、夜間、この界限は最も危険な場所とされた。
- (22) *Publick Spirit of the Whigs: Set Forth in Their Generous Encouragement of the Author of the Crisis* (1714).
- (23) Bathurst, Charles (1709-1786). ロンドンの出版業者。
- (24) Faulkner, George (1699-1775). ダブリンの出版業者。1728年、週2回発行の *the Dublin Journal* を刊行し大成功を収めた。1735年には、4巻からなる最初のスウィフト全集をダブリンで上梓した。
- (25) スウィフトは生涯に長短織りまぜて約275篇の詩作をしている。1692年5月3日の従弟トーマス・スウィフト宛の手紙で詩作に当って、スウィフトの場合、靈感がにわかに湧いてくるということはない。さわやかな朝の2時間が最

も詩作に適していると語っている。

- ②6) Towers, John. 生歿年未詳。
- ②7) Powerscourt, Co. Wicklow.
- ②8) *A Compleat Collection of Genteel and Ingenious Conversation, according to the most polite Mode and Method, now used at Court, and in the best Company of England* 1738.
- ②9) *Directions to Servants* 1745.
- ③0) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 31.
- ③1) Simon Wagstaff.
- ③2) Lord Smart and Lady Smart.
- ③3) Sir John Linger.
- ③4) Mr. Neverout.
- ③5) Miss Notable.
- ③6) short for *shod all round*, of a horse shod on all four feet.

以下、イタリック体の語句の説明はすべて Eric Partridge の注に則る。

- ③7) took a passing fancy to.
- ③8) a marriage de convenance.
- ③9) a warling = a despised person.

ここまでの引用原文は *The Prose Writings of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 163.

- ④0) Ibid., p. 165.
- ④1) a tester 12 ペンス銀貨。
Ibid., p. 165.
- ④2) Ibid., p. 174.
- ④3) Lady Answerall.
- ④4) Lord Sparkish.
- ④5) *The English Humourists* p. 129.
- ④6) Saint James's Palace. Henry 8 世から Victoria 女王に至るまでの王宮。
- ④7) White's Chocolate-House.
- ④8) ~ ⑤4) *The Prose Writings of Jonathan Swift* Vol. XIII, pp. 7-15.
- ⑤5) ~ ⑥0) Ibid., pp. 33-45.
- ⑥1) Pall Mall. ペルメルともいう。Trafalgar Square から St. James's Park にいたる街路。
- ⑥2) Temple Bar. City of Condon の西端にあった正門。国王といえども City に入るさいには、ここでロンドン市長の許可をとらなければならなかった。
- ⑥3) *Laws for The Dean's servants*. Op. cit., pp. 161-162.
- ⑥4) ⑥5) ⑥6) Ibid., pp. 161-162.
- ⑥7) ⑥8) ⑥9) *The Prose Writings of Jonathan Swift* Vol. XIII, pp. 46-51.
- ⑦0) Henry Fielding; *Jonathan Wild* 1743 イギリスの大盗賊ジョナサン・ワイ

ルド (1682? -1725) を主人公にした作品。

(7) Churton Collins; *Jonathan Swift* p. 228.

主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).

Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

David Nokes, *Jonathan Swift* (Oxford, 1987).

Aldous Huxley, *Do What You Will* (Books For Libraries Press, 1975).

J. I. Fischer & D. C. Mell, Jr., ed., *Contemporary Studies of Swift's Poetry*
(University of Delaware Press, 1981).

Harold Williams, ed. *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).